

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	王 詩 凝
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の連鎖構築 —日本語母語話者と中国人上級日本語学習者を対象に—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 永 田 良 太</p> <p>審査委員 教 授 白 川 博 之</p> <p>審査委員 教 授 柳 澤 浩 哉</p> <p>審査委員 教 授 高 永 茂 (文学研究科)</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、課題解決型談話の意見調整場面において、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者が確認要求表現によってどのように連鎖を構築するかを明らかにしたものである。従来、連鎖構築に関しては、特定の部分や局面について研究がなされてきたが、日本語教育の観点からは、意見調整の各部分や局面に見られる連鎖構築の全体像を明らかにすることが不可欠である。また、日本語学習者の会話では確認要求表現があまり使用されないことが指摘されているが、確認要求表現の代わりにどのような形式が用いられるか、その際に談話展開がどのように異なるかについては明らかにされていない。さらに、日本語学習者が確認要求表現を会話の中で適切に運用できるようになるためには、学習者の母語の要因を考慮しつつ、母語話者と学習者の使用傾向の異同を把握する必要がある。</p> <p>先行研究に残されたこれらの問題点をふまえ、本論文では以下の研究課題が設定されている。</p> <p>(1) 意見調整が行われる際に、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者によって用いられる確認要求表現の出現位置には、どのような特徴が見られるか。</p> <p>(2) 意見調整の【開始部】において、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者による確認要求表現の連鎖構築には、どのような特徴が見られるか。</p> <p>(3) 意見調整の【主要部】において、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者による確認要求表現の連鎖構築には、どのような特徴が見られるか。</p> <p>本論文は、全8章で構成される。論文の概要は次のとおりである。</p> <p>第1章では、課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の使用傾向について、連鎖構築の観点から日本語母語話者と中国人上級日本語学習者を比較して分析する必要性と意義が述べられている。</p> <p>第2章では、確認要求表現の用法、談話機能に関する先行研究、日本語母語話者と日本語学習者の談話中での使用傾向に関する先行研究を検討し、本研究の研究課題が導出されている。</p> <p>第3章では、本研究の分析資料と分析対象について説明されている。</p>			

第4章では、意見調整場面の全体構造および談話の構成要素という観点から、確認要求表現が意見調整のどの位置で見られるかが分析されている。その結果、【開始部】の「方向づけ」の局面において「問題」に言及する際に見られることが明らかにされている。一方、【主要部】の各局面において、「提案」に言及する際には「よね」や「じゃないか」という確認要求表現はあまり見られない。

第5章では、意見調整の【開始部】に着目し、確認要求表現によってどのような連鎖が構築されるかが分析されている。その結果、母語話者に多く見られた【提案内容に関する方向づけ】は学習者の会話には見られず、【提案のあり方に関する方向づけ】にその使用が偏ることが明らかにされている。その際には、学習者によって「問題」に言及された後、原案への偏りや新たな具体案が母語話者によって行われるという展開が見られた。

第6章では、意見調整の【主要部】に着目し、確認要求表現によってどのような連鎖が構築されるかが分析されている。その結果、相談局面において【展開型】が最も多く観察された。また、その際には、情報が学習者によって提示された後、母語話者によって提案が行われるという特徴が見られた。

第7章では、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の使用傾向の異同について、先行研究と比較しながら考察されている。日本語母語話者の会話では、確認要求表現が用いられることで、協働して提案が共有されながら課題が解決されていくという談話展開が実現される。一方、学習者には確認要求表現の使用が少なく、その代わりに、どの部分や局面においても、平叙文によって相手に対する賛成を表明したり、提案を主張したりすることが観察された。学習者に見られるこのような使用傾向は、意見調整のプロセスに関わっており、学習者の母語である中国語の影響を受けている可能性が示唆された。

第8章では、本研究で得られた結論がまとめられるとともに、今後の課題が述べられている。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1点目は、談話レベルで意見調整の開始部と主要部に着目することで、確認要求表現による連鎖構築の全体像を捉えるとともに、連鎖の種類と展開パターンを細分化することで、部分や局面の特徴によって確認要求表現の各形式が使い分けられていることを明らかにした点である。

2点目は、談話レベルで見られた確認要求表現の使用傾向と文レベルで捉えた意味用法との関わりを考察し、文法項目と文脈との関係を具体的に示した点である。加えて、談話展開上の機能と対人的機能に分けて、形式の談話機能を明らかにした点も、新奇性に富むものである。

3点目は、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の使用傾向の異同を明らかにし、学習者の母語による影響の可能性を指摘した点である。この点は、今後、中国語を母語とする日本語学習者の指導を考えるために重要である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和4年2月7日